

2022 vol.26

# こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER  
KYOTO UNIVERSITY

特集  
正念場





## ごあいさつ

「正念場」というのが、もともと仏教用語で「雑念を払い仏道を思い念ずることで、正しい真理を思うこと」で、それが「歌舞伎・浄瑠璃などで、主人公がその役の本質的性格（性根）を発揮させる最も重要な場面」という意味になり、さらに転じてその人の真価を問われるような重大で危機的な状況という意味になったのは、多くの読者にとってはじめて知ることではなかろうか。心理療法では、クライアントが問題を抱えて訪れ、時には危機的状況を迎えるなかで、その人の本質的あり方が現れてきて変化や解決に至ることが多い。その際に本人だけではなくて、セラピストも含めてまわりの人たちの本質的あり方も顕わになり、助けになったり妨害になったりするのが興味深いところである。貴重な正念場の体験を寄稿し、共有していただいた方々に感謝したい。また当センターも改組されるが、引き続き「こころ」ということばと本誌『こころの未来』を大切にしていきたい。

2022年3月

京都大学こころの未来研究センター長 河合俊雄

こころの未来  
KOKORO RESEARCH CENTER  
KYOTO UNIVERSITY

2022 vol.

26

目次

ごあいさつ	河合俊雄
01 巻頭言 正念場と絶体絶命と希望	鎌田東二
〈特集 正念場〉	
02 特集イントロ 少年時の正念場	吉岡 洋
04 対談 遊行する移動舞台車	やなぎみわ+吉岡 洋
論考	
14 正念場—— 決定的に受け身になる幸せ	加藤有希子
18 極私的正念場について	天野太郎
22 どんなことが起こっても、これだけは本当だと思うこと	堀内 勉
26 「正念場」が露わにしたこと	増田 聡
30 2020年度仕事一覧	
39 センターの主な動向（2020年10月～2021年3月）	
編集後記	



---

## 編集後記

「正念場」で執筆依頼したら、著者に正念場を与えてしまったようだ。結果たいへん面白い記事が集まった。私自身はこの号と共に、京都大学を定年退職します。『こころの未来』編集はとても楽しい経験でした。読者の皆様、ありがとうございました。(吉岡 洋)

本特集での吉岡先生の文章を読んで飛び上がるほど驚いた。私も中3のときの弁論大会で「弁論大会は不要だ」という“弁論”をしたからだ。還暦を迎えた昨年久しぶりに思い出したのだが、確かにあのころは人生の中での正念場の1つだったと思う。(広井良典)

正念場に対する経験や考えが、これほどまでに印象深く、心を動かすことに驚いた。ある種の「畏怖畏敬」の感情を生じさせるのが正念場なのかもしれない。センターにはこれまで様々な正念場があった。その経験をもとに、より良い未来につなげていかねばという思いである。(内田由紀子)

「ここが正念場だ」ではなく、「思えばあそこが正念場だった」と後から解釈して認知されることが興味深い。そのときが自分の性根が発揮された場面であったと後から振り返って考え、だから私はこういう存在だ、と私たちは自己を認識しているのだろう。(上田祥行)

今号の特集を読んで、正念場が結果的に追い込まれる厳しい局面であるなら、できれば避けたいものだが、それが自分の「本性」を自覚し、変容させるきっかけになるとしたら、むしろ僥倖と受け止めるべきかもしれない、と気づかされた。(原 章)

---



京都大学 KOKORO RESEARCH CENTER · KYOTO UNIVERSITY

こころの未来研究センター

